

看護師の感情規則形成過程の研究
看護教育の微視的相互作用分析を中心に

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
上仲 久

従来から対人援助職は、精神的にストレスの多い職業といわれてきたが、1975年前後の米国ではバーンアウトと呼ばれる精神的な疲弊状態が見られることが指摘され始めた。近年その疲弊の問題は、感情労働との関連をもって論考されることも多くなっている。看護師の感情管理は、性格の異なる感情規則が職務上に課せられていることなどから、困難であると指摘されている。したがって、看護教育の中では、感情管理は重要な教育事項の一つである。

しかし、看護基礎教育において、感情管理の知識やその方法が十分でない状況が指摘されている。そして、看護師の感情規則の教授は、教科書に書かれている内容を教えるというのではなく、とりわけ隣地実習の場での学びが大きいとされているが、現時点では、看護師の感情規則の形成過程を微視的に明らかにした研究は極めて少ない。

本研究は、A看護専門学校における精神看護学の倫理に関する授業を対象に、その中で感情規則が形成される過程を描きだすことを目的としている。研究方法では、看護学校の授業において、感情規則が学生の中に形成されるには、教員によって感情規則に関連した発話があり、その発話場面で学生が集中力を高めて耳を傾けていることが必要であると仮定している。そして、授業の観察(録音録画・ミニレポート)感情労働尺度 学生や看護教員へのインタビューをデータとして、二名の現役看護教員の協力を得てデータの分析を行った。

その結果、教員によって感情規則に関する発話があり、かつ学生が集中力を高めてその話を聴いている場面が明らかになった。それは、教員が自らの臨床経験の語った場面であった。その理由を、学生に対して行ったインタビューから意味づけると、学生は看護教員を看護師の先輩と観ているところがあり、看護教員によって語られる臨床経験談から、教科書などでは学びきれない看護師の感情性の部分、つまり感情規則に関する学びをしていると考察できた。また、学生は学校内での日常的な看護教員の振る舞いや態度の中からも、看護師の感情規則を形成する手がかりを得ているという示唆が得られた。

さらに、感情労働尺度から導いた感情労働指数をもって比較検討を行った結果、感情労働指数が高い学生と、低い学生では、同じ授業を経験しても感情労働指数の変化に違いがあることが示唆された。

また、医療現場でアルバイトをしている学生が、その経験を通じて、感情規則に過剰な形で自己をあわせていたところから、脱却しつつあることが明らかになった。